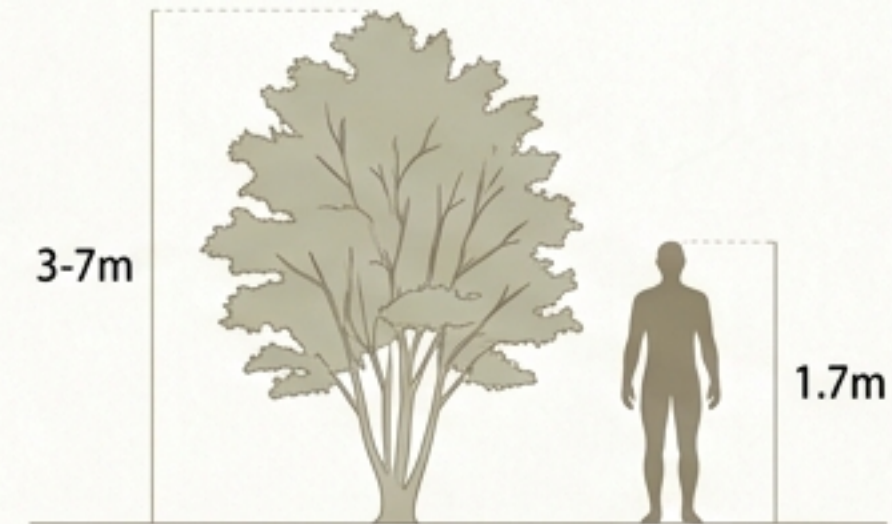




樹皮のまだら模様と、 夏を彩る白い穂状花

飢饉を救った歴史を秘める落葉小高木「リョウブ（令法）」のすべて

リョウブの基本分類と生息域



学名	<i>Clethra barbinervis</i>	分類	リョウブ科リョウブ属 (Clethraceae, Clethra)
樹形	落葉小高木／ 広葉樹	性別	雌雄異株
		樹高	3～7m
		分布 分布	北海道南部以南 ～九州、済州島

森で見分ける手がかり：茶褐色の平滑な樹皮

経年変化

古くなると表面が薄く剥がれ落ち、迷彩のような「まだら模様」を形成。



質感

茶褐色でツルツルとした平滑な手触り。

類似種との比較



ヒメシャラ（姫沙羅）



ナツツバキ（夏椿）

ヒメシャラ（姫沙羅）やナツツバキ（夏椿）も同様に樹皮が平滑でツルツルしているが、リョウブ特有の剥がれ方と模様が識別の鍵となる。

山々を白く染める、夏の総状花序



花期

6月～8月。山の中でひと際目立つ白やクリーム色の群生。

構造

総状花序 (Raceme)。枝の先に10～20cmの穂状の花を数個つける。無数の小さな花が密集して咲く。

生態系の役割

単体では目立つ花ではないが、樹全体を覆うように咲き誇る。非常に優れた蜜源(みつげん)であり、養蜂においても重宝されている。



葉から種子へ、秋から冬へのライフサイクル

Summer (葉の特徴)



長さ6~15cm、幅2~7cmの倒卵状長楕円形（先が尖る）。縁には細かい鋸歯（きよし）があり、枝の先に互生（ごせい）する。

Autumn (結実)



9月頃、花が散ったあとに3~4mmの小さな蒴果（さくか）を無数につける。

Winter (放出と越冬)



11月頃、葉が紅葉し落ちる頃に実は茶色く熟す。中から約1mmの極小の種子を放出し、冬場の野鳥の貴重な食料となる。

飢饉から命を繋いだ「救荒植物」としての歴史



[Step 1：採取]

春にリョウブの若葉（山菜）を摘み取る。



[Step 2：茹でる・乾燥]

すぐに食べず、茹でてからしっかりと乾燥させる。



[Step 3：保存]

飢饉（不作）の時期に備えて長期間貯蔵する。



[Step 4：炊き込み]

食料が尽きた際、乏しいお米に混ぜてかさ増しし、飢えをしのぐ。

救荒植物（きゅうこうしょくぶつ）。かつて食糧難の時代、この手間のかかる工程が多くの人々の命を救った。

法と農民の知恵が刻まれた、名前の由来



令法（リョウブ）



由来：かつて幕府や為政者が、飢饉に備えてこの樹の採取・貯蔵を「法令」で定めたことに由来する説。

畑積り（ハタツモリ）



由来：飢饉に備え、あらかじめ「畑」の収穫量（積り）を見越して植えられたとする説。

旗積り（ハタツモリ）



由来：無数に咲く白い穂状の花が、まるでたくさんの「旗」が風にひるがえっているように見えたとする景観由来の説。

苛酷な歴史を越え、夏の山に咲き誇る

花言葉 「溢れる思い」「くつろぎ」

誕生花 7月13日

かつては法令で植栽が義務付けられ、人々の命を繋ぐ過酷な役割を担ったリョウブ。現在では、その美しいまだら模様の樹皮と、風に揺れる白い花穂が、夏の山を歩く人々に「くつろぎ」を与え続けている。